★朝日放送／視聴覚情報より

歴史を旅する「金子直吉」評

歴史を語る場合、人物と時代のかかわりあいに重点をおかれるのは当然であるが、金子を描くことにより、わが国近代経済の道程をあざやかにした点に於いて、この番組は見事だったというほかはない。神戸の砂糖問屋にすぎなかった鈴木商店が、日清、日露、第一次世界大戦と、戦争のたびごとに躍進をつづけ、ついに三井、三菱に匹敵する大コンツェルンを形成したプロセスは、日本経済史そのものといえるが、それが短かい番組によくまとまっていた。そして鈴木商店をかくあらしめ、また没落させたのが「番頭」金子であることも、彼の強烈な個性を描写することによって、遺憾なく表現されている。彼は組織を重視せず、また金融を台湾銀行に依存し、他の財閥のごとく自身の銀行をもたなかったために失敗した。

しかし彼が時代に先がけて創始した「帝人」が、今の隆盛をみていることは、その鋭い先見性を実証するものである。

この番組の作者は、時代の背景として人物を描くことを避け、むしろ時代の中に主人公をおく手法をとったが、それがかえって金子の姿を浮彫りにさせた。また、とかく主人公を英雄化したがる誘惑をしりぞけ、冷たい目で凝視している。その意味において、このドキュメンタリーはすぐれた伝記であるとともに、経営者にとっては教科書的な作品といえる。シリーズの中、これまで見たかぎりでは最高の傑作であった。

★サンテレビ／おんな風土記

「波の音」の鈴木よね

★放送日十二月十一日（木）

今回サンテレビ局の企画にてお家様の人間像を浮き彫りにしようと取材に来た。鈴木御本家の御厚意で貴重なる資料借用、台本製作に懸命協力した。去る十一月十九日由縁りの六甲祥竜寺その他に於いてロケを行った。東京から女優磯村みどり来神、当地詩人君本昌久と対談で終った。

台本覚書より

「波のおと」は鈴木よねの遺稿集の題名からとりました。晩年のよねは、塩屋の邸宅で、塩屋の浜から静かな波音をきいたことでしょうが、その生い立ちをみると、明治維新の混乱期の激動の波音をきき育ったといえます。一方、資本主義は欧米を中心として全盛期をむかえ、自由競争、自由貿易を基礎とする、いわゆる自由主義経済の波は、貿易港神戸にいち早く押し寄せました。

姫路の商家で育ったよねが、神戸の貿易商鈴木岩治郎に嫁いだ動機には、そうした時代感覚の目ざめがあったといえ、没落した武家の娘にはあり得ないことだったと思います。

よねの人間像をいかにして描くかということが、この番組の最大の狙いです。世評での鈴木よねは女傑とか、尼将軍とか誇大にいわれていますが、よねを知っている鈴木商店の店員、その他の人々は「お家さん」「よねさん」と呼び親しまれています。

しかも大らかで、明るく、淡白なところは国際的であり、ミナト神戸の風土がつくった気質でもあると思われます。また、余暇に布巾（ふきん）づくりをつゞけたこと、四季おりおりの心の動きを和歌に託したことなど繊細なやさしさが感じられます。

具体的な内容に入りますと、大正七年の米騒動による鈴木商店の焼き打ち事件をさけることは出来ず、この歴史的な事件を、どのように解釈しているかが問題になります。

これは客観的な事実として捉え〝民衆の革命的エネルギー云々〟は、番組外のこととしました。事実、指導者による理論的な、組織的なものではなく、江戸時代からの一揆（暴動）の最後のものという見方が正しいと思われます。

主人公よねにとって、むしろその後の昭和二年の倒産の方が大きく、金融恐慌と大財閥の支配力の強化、中国への進出と、歴史的なかかわりが深いといえます。

構成――おゝまかに次のようにしました。

○米騒動と鈴木よね（大正七年）
○鈴木よねの生いたち（嘉永五年生れ）
○よね鈴木岩治郎に嫁ぐ（明治十年）
○岩治郎の死去とよねの事業継承（明治二十七年）
○鈴木商店解散（昭和二年）
○晩年のよね（昭和十三年没）

シンガポールの店

森田歳一

創設された安藤珍成、大久保弥十郎両先輩が他界された今日、昭和二年閉店した時の責任者として鈴木商店の思い出を一筆せざるを得ないのである。

私は大正六年関学高商部を卒業して入社した。他校の様に先輩は一人も居らず関学の吉岡院長の紹介状を持って金子御大に面会を求めた。御多用の中を繰合わせ、中村勇吉君（鈴木薄荷）と二人引見された。進路は工業か商業かなど諮問があって口頭試験は終った。すぐ入社の許可があったのだが金子さんが直接入試されたのは珍らしい事と思った。恐らく関学からの入社は初めてなので、翁の御注意を引いたのかも知れない。翌年から毎年三、四人の採用があり今も尚日商岩井には多数の同窓が居る。御家さんの御伴して米沢の人造糸工場を見学したのは大正七年であった。若御主人岩蔵様も御一緒で私は鞄持の役、米沢では久村、本庄、畑さん達が工場を案内して説明された三等車より知らない若者には、一等車はまばゆい位であった。御家さんは座席にすわられ手拍子で何かを口ずさんで居られたのが今でもまぶたに浮ぶ。

大正八年にはシンガポール勤務となった。SZKマークでゴム錫を積出すのが本命であるが、土地柄船便の中継で関係者の送迎も一つの仕事。ロンドンの吉田さん、印度の多賀さん、ジャバの寺崎さん等々数へきれない。

日沙商会との関係、ボルネオサラワク農園の生産ゴムの販売材料の買付多種多用で、園長大関さんは勿論、依岡省輔、西川玉之助さん達の御出張も度々であった。

国際汽船の船員入れ換へ、当時ジャバ糖の欧米輸出は鈴木が一手にやった位派手なもので、船団は東奔西走日本に帰港する間がない。

日本の船員を当地に待期させ、薪炭補給に当地へ入港すると三、四十人の乗り換へ作業、勿論国際汽船からもベテラン船長や役員が駐在してくれたが、多数の船員が昼夜市中にゴロ〳〵していて問題の起らない筈はない。幾度か総領事にも厄介をかけた。勘定の立替払丈でも大仕事であった。

台銀支店長宮島譲二氏（ロンドン時代高畑さんとのゴルフ仲間）は公私面倒を見てくれた。事件が起る前から鈴木の借出し二億にも達しておると耳打してくれた。日銀の業行高二十億位の時代だから驚いたのも無理はない。

幸い私方の店は黒字で終始したので銀行には迷惑をかけてない。却て激励してくれ他所の引揚金不足も送金が許され多少の残金でも持ち帰えり本店へ納入した次第である。

（シンガポール支店）
（四九・十・五）

主義以前の世界観

足立宇三郎

本日は自分のごとき、余り平素読書しない者が、読書研究に没頭しておられる皆さんの前に、大げさな世界問題をお話しいたすことは、おこがましいことであります。しかしこれには自分を励ます先例があるからであります。

自分は学校卒業後、すぐに神戸の鈴木商店に就職いたしました。同店は第一次世界大戦の時に大活躍をして、我国の事業史上に特異の記録を残したのでありますが、その総指揮をしていた金子直吉という人は、高知県出身にて、十一才より丁稚奉公をして成長し、どこの商業学校でも、大学でも勉強していませんでした。しかも良く世界の事情に通じ、巨大なる事業を指導した事実は、自分に深い反省を与えました。その結果、風俗書物を読まなければ人の前に立てない、物も云えないなどということは、実に意気地のないことである。人はたとえ無学でも文盲でも、何らはばかることなく天下を横行濶歩すべしというふうにさとったのであります。